
おまけのような小咄 ~ pocket size ~

L i l a c

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おまけのような小咄〜pocket size〜

【Nコード】

N5709T

【作者名】

Lilac

【あらすじ】

短編集です。

ポケットサイズのおまけ小咄

童やファンタジー物、様々なジャンルを取り扱っております。

青空（前書き）

初めて書いた短編ですので
短編？

意味分からん
なことになるかも…
です。

おまけみたいな気持ちで軽く読んで下さい。

青空

竜は飛ぶ。

空蒼く、天高い雲を超えて。

人は歩く。

緑の大地を確かに踏みしめて。

私は空を見上げた。

天の竜を見上げた。

竜は私を見下ろし、大空を大きく旋回する。

『シユア』

名前を呼ぶと、竜は物凄い速さで降下してきた。

空を裂く紅色の光が眩しい。

地面に近くなってきた、竜は畳んでいた翼を横に大きく広げた。

強い風に目を瞑る。

竜は着地したようだ。大地に大きな衝撃が走り、風は収まる。

閉じている眼を開くと、そこには空で見るより大きな竜がいた。

黄金の瞳は黒く細い瞳孔があって鋭い。

瞳だけでも私の頭くらいあるかもしれない。

煌めく紅色の鱗は規則正しく並び、どんな金属を磨いてもでない輝きを放っている。

これが戦場では、どんな武器をも跳ね返す屈強な鎧となるのだ。

精悍な顔つきの竜が口を僅かに開くと鋭い牙が覗いた。

そしてどんな太刀よりも大きい爪は、地面に食い込んで大地を大きく抉っている。

これが戦場では、何をも切り裂く鋭利な武器となるのだ。

先程から人が人らしいゆったりとした足取りで近づいてきている。

竜の物ほどではないにせよ、なかなか強そうな鎧を身に纏っている。

堅実な人柄を表したかのような硬い表情…。

この人間の男とは…上手くいつているのかもしれない。

「オーク」

男は私の名を呼んで、私の鼻面を撫でた。

ここに来た最初のころは私に対する失礼な行為だと思っていたが、今はまんざらでもない。

「今日はシユアに教えてもらうんだぞ」

そう言われて私は目の前の竜を見た。

私よりもっと大きく強そうだ。

しかし、私は負けない。

訓練だろうと手を抜かない。

私は小さき竜だけど

いつかきつと

いつかきつと

世界一強い竜になってみせる。

ほかの竜より輝く黄金の瞳が輝くから…私に出来ないことはない。

翠色の首を、身体が少しでも大きく見えるように伸ばして

まだ小さな牙と爪をぎゅっと固めて

私は飛び立った。

蒼く遠い空へ…。

青空（後書き）

私は長い話しか考えられないというか、短い文章に収める文章力がないんですね…。
難しいです。

とにかく、ここまで読んでいただきありがとうございます！

納屋の中（前書き）

少し邪悪な内容なので、苦手な方もいるかもしれませんが…

まあ何となくそういう話なんだなと思いながら読めば、平気だと思います

納屋の中

この街は汚い。

だからこそ私と家族はここに隠れている。

隠れやすいからだ。

今日からこの納屋の中で、隠れ潜みながら暮らすことにする。

××月 日

この街に来てから何年か経った。私の身体にも老いが見え始めている。

息子や妻などが私のために、食糧を色々なところから失敬してくれる。

しかし昨日、息子は食糧を調達しに行ったきり帰ってこなかった。

『狩り』に遭ったのかもしれない。近所に住む我らの仲間も狩られてしまっていた。

人とは愚かな生き物だ。仲間同士で殺し合つし、生き物を残酷に殺す。

怒りはわなわなと身体を伝い、手足を震えさせる。

こんな街に居てはいけない。

ここは食糧があるし、隠れる場所があつて外より安全だ。

しかし大きなリスクが伴う。

奴らに見つかれば殺されてしまうだろう。

その前に楽して食糧を手に入れようとここに来たのが間違いだったかもしれない。

私は決心して納屋の外に出ることにした。

外で妻を待とう。

そう思つて立ち上がった瞬間、首筋に硬い物が食い込んだ。

もがいたら突き刺さつてしまいそうだ。

しかし逃げない訳にはいかない。

精一杯もがいた。

しかし、硬い物は余計に強く食い込むだけだ。

虚しくもがく私の目の前に、何かが立ちはだかった。

それは5歳くらいの男の子で、私を見て笑っている。

子供とは残酷なモノだ。苦しそうにしている私に嘲笑を浴びせる。

「パパ見てよ！ジョンが捕まえたよ！」

子供が親を呼ぶ。

すぐに子供の父親がやってきた。

そいつは私を見て不快そうな表情を浮かべると、やけに明るい声で言った。

「ジョン！よくやったなあ！その溝鼠野郎にはほんと困らされてたんだ」

私の後ろの硬い物が少し緩んで、

な

というぐもった声がした。

緩んだ間に逃げたかったのだが、もうすでに首には猫の牙が突き刺さっている。

見ているしかない。

「パパ！もちろんこいつは殺すんだよね？見たいなあ」

子供はニヤニヤしながら言った。

父親はオーバーすぎるリアクションをして言った。

「もちろんさ！いい気味だよ！さあ今回はどうしようかな…」

すると父親は猫から私をもぎ取って、どこかに連れて行った。

それから何が起こったか、私には知る由もない。

ただ、明日、無惨な鼠の死骸がどこかに転がっているのは確かだ。

納屋の中（後書き）

頑張って比較的黒い話を投稿してみました

色んなジャンルに挑戦すべきですね

迷信（前書き）

今回は迷信についての話です

どうぞお楽しみください

迷信

結花はガラガラするのが好きな女子高生。

いつもおやつを食べては寝て、食べては寝て…
を繰り返す。

本人は止めようとは思っているのだけど、そんな決心はすぐ吹き飛んでしまう。

そして、今日は9月15日、十五夜だ。

結花はいつもより眠いなんて薄ぼんやり考えていたが、せつかくの満月なので月明かりに照らされよう、とまた薄ぼんやり考えた。

団子を口にしながら見る月は、なかなか風流なものだった。

しかしだんだんつまらなくなってくる…。

結花は眠気に負けて、ベッドに吸い込まれるように倒れ込んだ。

あれ、私…寝ちゃったんだ…。
今何時だろ？

結花はそう思ってケータイに脚を伸ばした。

ん？脚？

暗い中、目を凝らすと、自分の手が…足になっていた。

二つの蹄がある、茶色の足…。

寝ぼけているんだろう。

結花は目を擦ろうとした。

すると、湿った何かに蹄が当たった。

それは、自分の感覚だと、鼻を触っているような感覚…。

しかし本来鼻があるはずの位置よりかなり前に鼻がある。

考えているうちに横になるのが辛くなってきた。

ベッドから降りようとする。

しかし、元手の前脚や本来の脚は前に投げ出され、なかなかうまく動かせない。

もがくうちに鼻息が荒くなる。

すると鼻からごーっという音がする。

下の階にいる親に危機を知らせようとするけれど、叫んでも叫んでも

もー

という間の抜けた声しかない。

結花は確信した。

私は牛になったんだ。

食って寝て、寝て食って、牛になったんだ！

聞いたことがある。

馬はずっと横になっていると、内臓が壊死して死んじゃう、みたいなこと…。

それなら牛も同じだ。

死んじゃう…死んじゃう…死んじゃう…

もがく度にだんだん慣れてきて、身体をどう動かしていけばいいか分かってきた。

でも、急に眠気が襲ってきて、また結花は眠ってしまった。

…目覚めると、まだ月は輝いている。

すかさず結花は手のひらを見た。

…ちゃんと人間の手だ。

結花は安堵の溜め息をついて、起き上がった。

そして、ベッドを見る。

そこには…めちゃくちゃになったベッドのシーツと、何かの生き物の毛がたくさん付いていた。

迷信（後書き）

薄暗い話が多くなってきました…

今回は私への教訓として書きましたww

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5709t/>

おまけのような小咄 ~ pocket size ~

2011年10月9日01時40分発行